立柱式で、エノキの柱を囲んで手を結ぶ参加者

さぁ夢屋再建へ

富士見　利用者、支援者ら立柱式

五月十七日未明の不審火で店舗を兼ねた施設内を全焼した、富士見町信濃境の身体障害者デイサービス「夢屋」（中山靖子施設長）は、再建に向けた準備を進めている。五日は上棟式にかわる「立柱（りっちゅう）式」を行い、利用者とスタッフ、支援者が団結して力強く再スタートを切った。

（川合弘人）

9月オープン

立柱式は、新店舗中央に目通り約六十㌢、南アルプス（伊那市）産のエノキを据えたことから実施。火災以来初めて関係者が集まった。改修工事の設計、施工を請け負った田空間工作所（諏訪市）の関謙二社長（五四）が、大工の棟梁（とうりょう）として神事を行った。

中山施設長は「三百人から手紙やメールでの励まし、お見舞いをいただいた」と参加者に感謝の気持ちを語った。県諏訪地方事務所の八重田修所長ら県関係者も出席し、再建を祝福した。

新店舗は約百平方㍍。作業所を兼ねたクッキー作りの厨房、喫茶、リサイクル店の複合施設で、田空間工作所では「手づくり」をコンセプトに建設する。

いす、テーブルはオリジナル製品、照明は日本装飾美術学校に制作を依頼し、学生、講師の作品を使う考え。「夢屋プランドを前面に出したい」としている。

改修工事は六月上旬に着工し、今月末までに完成。オープンは九月になる見込みだ。